㝡上物語　五忠

モ
5

最上物語巻之一　又

目録

一　上ノ山城攻之事
　附リ　伊達照宗上ノ山ニ加勢之事
　　并　松原合戦之事

一　伊達家与最上家和睦之事

一　里見民部逆心之事

山形県立図書館 66106 昭和廿四年二月三十日

最上物語巻之一

上山城攻之事

附り 伊達照宗上山江加勢之事

并 松原合戦之事

かくて天正の始ハ没落し定信ハ
隣家をようし最上の城せんと胡
田の村かはらしの辺の地の国人

K289
Mo
5-1

せんしまたに細川頼之といひしハ
使見しけるに中に遂けらるゝは人傑也
澤々此宗之義光とハさりしけれ共
さやうなりしいへしもかましく武勇にて
しと人をゆるかり士卒を禮せり
國中の武士一と隣あわとしいへども其
權威ふ畏れてむ隨気録し
も清和の流を汲なからいふ人ぞ

かれが血風しにたる人や絶れども鎌倉
籠しえまなりけれバ義光して天
をうけそのまゝ継かれバ けれバ照
宗々なが緩かとあり ゝ来日ごとに
業陶とにて あにあつてハなかり
北幕府にて をとやまて
ゆきかし まれハ無常なりし大に
後代の絶えべき住宅も何ぞが相続

出張し宮をはなれて矢比禮ましこて
らうさんと也とあるあさかふすれバ頻
風に情をもよふしたる絶しく当(?)連(?)
朋知の芭蕉書残あし時もと移て夜
手表人あ馬かそしそと時を久の花とそへ
盈しまし中やまとうしすにハゐ
らねども諸人此新句をよまんおもわ
すれバ元人銘を玉つ千すと伝りあれバ

予川かしこ多り甚しくても世に伝へ像(?)
篇に芭蕉書を呈し是れハ名翁のも支(?)
かさしる多くなし情にしてかし用宮(?)とい
だましくも出塚をとなえし道無事を
川うけ越比いろをもなしして與宗
此かの使をく僧おれし山形出てハ葉光
仕て民書店(?)張備後(?)送て入る吉井伊
豆伊良子浮谷迄伴(?)伊きし上舟(?)候

岩佐関拵候由様二而京中ニ揃かと
と始めとし宗旨の名もかくと筆也
せられけるハ世流より山之部伊達隠
奥の無宗とて一流しく高不く落りと
ありし後ハ無宗と号にそんの所
ほの物かましハ私申れ承と致也
南下高ましらん様さしにせ同る
とも味方宗して物ハせて門徒衆

法談しゝ内よりは門徒を是長たに
これらか領知へふミてける奥されの祭
たゞしに白仏をふかせて前とうり
其分ん悪しき物しも云縁せられハ
かゝるんと是ハ寒しも通信此方へハ
里見人得山花其仰宗山来結
小宗あり二市ら談施のしの五面
人形合二縁一ヶ三面人范物

こゝ御但道案内のよしとしの首尾に郡の
人ゆハ知兵ヱ又甚吾兵衛と志村
伊兵ヱハ江常観音也継所なれバこそ大
軍也今すぎ羌来あし迄新関関係也
丹波より之を引き神保語在をさし添
ちう金人と加様せす被御使の御とも
魔御より南に向ふつゝし紀二里ま
山より西笠小あらて行し六七十丁もゆる

登し上山より山腹へ北往還杉並をいふ
事に古き皇跡も東より三方ハ深田に
東一方ハ霧したる山続きにして御
便入る道路ハしるのせまき七搦ち命の
御義ありけれバこゝろみに何すゝる道すヘハ
八重九重に構へ東より西に至る
早くし山北やむしに道毎へと川ぞけ
後ろ攻北関分堅要にいへし積石秋り

歳暮にかなひ候へ共やむなし依之
より頼ミ伊達陸奥守政宗ハ行会様
中陸田治部石田豊前伊達民部田川
之屋なりしが小伴丈を出し奥へ
手勢千余之子伊達上山へ参りける
大将文清見せず先ハ陸奥守ヲ
会津代ゟしにとりと云重々をさしまし
かくて勢ゟける　政宗ハ清兼二千の軍勢

星見内荒日く氏郷を頼もし合戦の
勢ひりやくを取ぬ国ハ取しに清見ト
されるハまづ伊達勢を二手にわかちまし
山中よりおこし出しゟ川をつゞきへ攻
伏兵勢を攻るゆへ其ゆへ勢光さらば
めぐし謀議せん　勢兵を以京に隠し
なる一手向ひ合せ合戦せば京にかせんは
かれども中関太刀しぬ早速かしこた

鞍をふせし時青北面し義光と號し
ながらにいくさはかぶんとなりけるに是にも
おぢさる事なりし一家にをこりて留守なり
けやけしながら義光いかに猛しても您
定後家に前まで歴し相撲に道し
度にまつる押伝まして山林と高位
生しや中されハ無宗はめる中すれ
くるハまさる知音理にかゝりく

是ハ老かつて義光北国ハ家宮ろ
侍ありしより成侍も大事にかけて
人ありさこと国にも七月に行てぬ道
党と人竜をさす住良子宗平と勝
としせし義光北宮をとなりける
武宮にはこのなりしともハ常後も
氏へなど様ひをいまだ大事しめる也
当れバ自ぜん熱北禄平に高まり

ミ午しあけしか夜に乗切れ宵ちへとこ
然るに城こた丈夫にかまへさせ最上義光
こらへかね道路して城中より打出るとや
くし何方ともすて打つ一揆にかけ
あやまりしとの分別有りし味方無念
に打しまへは身も大坂と引取候
敵とは存ぜず怪我しのかたき大将こらへ
ども此由を聞くまゝ敵の構なりとさぐり

知りて後に事ともなり居られ候に
甲斐武田信玄は北条氏康今
日本にて制札を出しけるその上
おもしろく書きしたるよしその内に
伊達正宗父子も宗輝同じく年寄
ありしと聞れば立てかつ攻にせまる
しも手遣の城をかまへかくし味方
攻いかにしてもへ最上義光父子ども

つく道法印ハ曲し変大事也合
せんせいん寝して あかし何も存じも
是ハ八ハ法気中りるハ味方如法とせ
むりしかりハ義光王法とおもひしてよ
山之まじあ候せん既ハ依之の音べき
山谷何月に此重候へハ西すね身ける
人数ともしこちまる也しにやま
御ハ歎其かなしみ退居せん既の事ハ

新羅三郎ハ以御此報のせし去れとも義
光是思ふかりれバ近衛也仰にかゝ
悌をおもふて身ハ中途退出して御意を
まかりるあかりハ下部也中しつやまし
たる靈道を本懐にし事に付ねごとく
如何し事ハ是御座候か不存候人如法
なと何かし歎也勤後とも有之出
義光其悲しく存かへし相又思なも是

急しく中々それハ無寄も何意しく
五百余を二手にわけて先陣片倉
備中守あつしく二千余小十郎浜田
二千余騎合五千余人城へ押寄る
押寄る山路の城中にハ義光か氏家
尾張日見後見遠藤出羽守坂内蔵
飯田掃部あつしく大和をまとい先人を
しく二本の旗を立て向ふ見へ軍兵

許氏向ひけるか氏家国縁途をなして
申けるハ今度伊達照宗会津蘆名兼氏
加勢として大軍を率し押寄る
事にて候へハ難儀なるへく候ともすへて
しうち山まで深くして攻入らる
これもとめて麻を取るたちの上
返りして見事とそ申しけるに難波氏
城へ攻入るとも城中ハ遊善宗牢人

何し給ハゝあさ十日にハ旅嫌にて座所ハで
二時君大守を引率し玉ひ遠侍にハ
数兵を二重にうけて君如何の帳台を
戦ひける少時一度ハおもひもよらざる方
より君われうしろに向らんしと待うけず
二時味方住還に引退くんしとあらまし知
を満泉寺門助左衛門ハ西より続
我押足し二方より進兵三方か日へ

進入討さんとしけるところに三讃にかけ此
らつるかとどまりて君ハ若稲人ハ
日保を乞礼悪れ去げけるに従を立て
えなくとりつゝ松原へ一丈まつに討入照
宗親権兵をかけ給ひ十ゑミしまふとの
討ちハ数兵首後を見かへしとて山へ引き
籠し二時供会おこり立し松本山を
取逃れ行きける田新[illegible]兵衛進て見

もつとも尚さらせのふかまりハ此利運にて
なひかんものかくなし要害をこしらへ
けれバ義光大に御悦ありし先陣ハ
自先後中とかまへて都合千人備をこしらへる
大将小泉掃部助加屋大将大蔵同年人
新木半右衛門岩瀬内膳行法式部風呂
元大将にハ木七郎丸組かしらなり二
陣ハ氏家尾張守を旗本として都合百余人其余の

其外守大泉野山平六同新兵衛細
細木小平治稲多将監丹生源蔵
熊谷治部左衛門内海金平岩崎二郎
本多人数千に旗本なり二陣ハ義光
こらへがけ押寄ハ此旗本二千余京勢の
多勢七千余人勢ましくして押出し
砂川をこさして西の備に備をこしらへる
照宗北しよの又義光北出るとて浜迄

ましけれバさうしバかき三しよのおもて
照宗人数をそろへおしよせ候ハ石田豊
前守浮田民部少輔七百余騎松原にお
しよせて在家を放火し一ゝふれ近辺を
おし静まりかへりて候へハ白地
纔中なるを知りて敵ハ味方を三百
かけて討死しけるこそ氣の毒なる兼て
ふかくしたりける何やまちまちなる事かくし浮

見合よしと白候を何とかけけれども
せり照宗これを見て支へし敵ハ難し
たかゝし人々俄に支へたる近合も手
と知せけれハ石田豊前守浮田民部
あつし馬上に三何かゝりかゝれしを
いふまりつめしとまり旗を奥列せん
一同に閧を作りつゝ松原村など一文
字に通又りけれハ日影纔中なる川手さく

鉄炮備をさしかへに近江の数合四五百にせ
まいらせをましや井かへにて居しをさせん
旅をふれしをさしかへしぶだいしてしまわ
せられまいらせ近江にける奥州鎮させんと
こゝろしく井ありされ共也四日にわたる
てかくとかくてより清定馬上にて大音揚く
言をと近江みのとしよのことくもかうれしとまゝ
りんをと吉備第第にこ神わしける是之

京こしる雷名しも名家かけし一處に
清を井近江にまかりて佐近石田みせらば
かねてし小市こゝしろにたゞふし
與宗これとかくかりしからつかゝ与辞を
井ふつし旗をとつてわせかゞ蔵屋国防
白川にて興宗北方かたにゆつてまま
足にかし掛て弟義光これとえを
ひかし氏家居勝に宅ひかるは数人白は

かゝる破寥せんとする所ハ照宗ニ今旅
あくとくへし我ほか西路へむかふとも之
とも羞てより小泉掃部行信ほこそ
をば伏しとふし重ねれバ欽是無とぞ
ま坐ーニて時三郎宗か狩野をもつて照
宗を進候さんにと申たりけれハ何も坐
かゝるニハ城代ニ向ひてる所倉又子弟
ニ海兼我か小蕎様を物語さすは我ハ

あこぶの新民なれバんニ十余年なりしも兒を
世にたへし小縁をもつて大猷さまへさぎ
らしろをこまやかに何つくかいたしまさ
まりれハ圓鑑形を佛ニ祖信となりて
やうして肥後和をしてまゐらせ半道統ハ沙
氣出ハ何の用ハなしけり也へて冥し
尾張こうかて奉戴とさつて狩野不答
とさわるにわたし浅聞する照宗ハさらづ

かゝる嶋と云迄見かへりしと申なれば
伊達白川とこそ此所にして一せんにた
此かるよしつゝ海道に伊達がしやしまて
けるよし見へてあるうちに義光公の旗本
に見此名一万ばかり出向て大いにしく
先は本宮在所にて矢比なる新関
石見朝比奈左衛門佐々木左衛門押卓
持合に名を進む石田豊前といふもの

みてし後ろとまうけて此かるる白野
絶ゆるなりけりやありて大将御旅
と寄らせて越前し紀事と云ふ事
我々に繕ひしてきこえし此かる事の
白北禍ぞくしに卯北花あしくれ
濱に寄るしも北西枝甲と枝前に
若かし言文言足の楼の梓かゝりしと
川さけ大音にげし名寄りまるは義

出家の身にてさうらふものゝ何とてか並べて者
にも見へしなりけん定は氏の城主日野
紀伊守満定しやうものにてなりけれ
ものにきしんじいくさも無しきつかひと
ほうらへつゝしまつりくだに池入ハ須田小
十郎もあまたくだりして馬を逆をも盛宗これ
と入てはいかがしてき親ひきて有小組て
前またまたも走せたる原田ハ郎等にこれを

見てはいそてみんなもんと十文字を持ちて走り出
ごさうこれハ盛宗が眼近に原田八郎も諸と
やうやうにいかにもえしと近寄る
能やかなへてしく宛かくてつゝし何か不
親氏武名振るわいでわんなもんと挿そう
定てこそらん小なれともかくと原田
まづしく誰ぐり定まきりと定入して斎
思ひを遂げ定いふつゝく様にちよるれハ法

ともにくはしく見へとかゝりしも遠江次
忠向より手をわせがかりし只胴に手を込き
ぬ村田与市これを見て手早く抜きて
能中ゝ指交来し種に掛りはト市
好ゝると引きつし能中ゝが妻白く
家来云もて跪海定をつくやさまさ
悼がまゝ身かゝかして云ふと定まらし村
田が聡角引つかゞ目もりこるさし

よしなしとてあり投出せば味方の者共
此事あり押へて首をとりしる郎也
是も当ぬ出合より小泉藤次郎が首
なりあへ行伏民部ここにの軍士共討別
能ぞしいかり伏を統して照宗乃
揺合とこうしろ北方より静かしと馬と
進む奥列ぜんこれをみて長ゝや伏
[illegible]かしいかりしや[illegible]照宗北[illegible][illegible]

裏くづれして逃去せハ諸勢一向にさ
ゝえ立て陣立になりかねと山形勢ハ
物ともせず押かけ来りけれバ案
立れバ照宗もこらへ兼して防ぐに
術尽てかゝりけれハ先陣後陣ともに敗
軍して坂の上まで引退て所々合戦
浅田浅羽照宗もろともに士卒と
くりかへしとつてかへしても隊伍乱れ城中へ

伊達の家中五百余人若党と討死して
おし掛るに取よりて落行しを遠
主ひ宮部新発所ともいさまゝに
なりつゝ引返し照宗も既に打申て
えつらりしか譜代の者ども集合
すゝ討死すへきよしのこゝ勝と進き
ら山形勢ハ西のまゝに打勝て分
捕して后も打捕して照宗ハ上の

山近く里遠き深き所の中にしも候
はとゝきすも鳴て寂しけれハ猶木の本の下にも
此一義をも弁へ得ず未だ何事も知らぬ者も
多く許せ無念に思ひける人も多し
いかなる斗略とも知らず丹誠を誠に
歴きや恵み秋何にか寄り来たし候かな
本を見て元死したる事を入れしく
我に差なきものなれは聖に無常の

奥なる涅槃に常の楽と我と浄と
よみ山近く迎に無常に対面いたし
無数の経論なり給ふとはいへども
かなしみは今我論ふりたるしと承り
候へは此なかにも他の邪念多くあり候へ
又是非に諸宗をもすて幸に存
此観念を道を定めて万事を抛ちて
中にかしこ候ひし西の水底の苦

ゆへハ頼義と相模守の御行一味して
平家方ともおもハしハみなゆるしきりに
源家の末の子孫ハ義光とてありし大将
乃前後どもハ源家と思しめしまして
しかれハ本にも此人ゆへし御出陣
常陸にこれハ此衆ともいかなるおなしき
頼ミなくも参らせかつす此よりてまた
召し此形見も此身をしらかてまへつる

かくて安芸としてハ此度にかけおとしたてまつれハ
と流しハやされ候ハ行念仏申
逃ども奥方の御恥をしり給にたる
ミちぞ宗之家氏ら大の礼とそある
みなに智者ありけれども人のいひ
ゆゑ御門ハ一也にして剣ハかうらくん
よろこぶ君も源氏も此木ゆへつく
御本西ハいかなる中にけれハ源氏

義弘里見同前して舟よりけるハ乗事
これよりも義光乃武勇ゆゑなりしかバ
さし変して関東に及ばざりけり
然がハいかにとて人々後是を称云伝ふ謀ふ
中々の作のごとく伊達家を合たれバ
近年にも猶ましよの事へりバ紀ハ全
諸のうちめし子しかれバしも十七
中々れバ荒議にて同しりき如に

義光より使者として小国大膳を
よりゐて送りけるハ義光君常にも
もと京都将軍家より長びきしと兼
羽州の牧に補せられしより備兼ハ中に
およびて当家へも昵懇なりしかバこ
然るハ近隣の誼ありとして桃生表を
へ來勤せらるべきよし仰遣し給ふに隆
御様とりいふきて一揆を退治せらる元

らん意恨ゆゑしにおよばれつゝありしかば
惜しく清兼たゞならぬ危難をも免れ給ひぬ
しかして照宗度清兼を同意なりしかば義光
大慶にてこれにまさり候はじと申しけれハ照宗
宗清兼大に悦び手に握何とぞり
かゝりし照宗ハ早く源にあふまじき
清兼ハ松本義光源へ取詰るの
直かゝりしけるつゝ相死ハ源し玉ひ

りしよつゝ山旅の城光白しとぞ申
望んなりしとぞ

星見民部逆心の事

附清兼生害の事

于後藤光令民部尾張守是持伊
もと伊豆ハ宗平自光純光もとあまし
無双の一戦にもいづれも此智勇にまつろ
味方するの勝利となり照宗ましましたる

て和漢にまなびし文学者の面目
何事かこれにまさるべき絶筆をつくし事を
思ひ見るに、後葉無窮にこれを定りし
のこせしかど世宗に捨られし氣を届し
諸家のあらざりしを別るといへども争てか
自分に絶とさし難ければしんや継しかば
次第に人殺をさし辞しておきを許し
非凡なる所手とゆれば一人の業

取り作はさりもにはなく元宗もらやら
れば一しもお無比独特の血もかうあらば
事に格式字馬と翁もまいで無上の
風なる気象と格にて一へんはなく僻愛
意にかふ事しとも是れは義光かき
格し画して諸法文しこゝにあ
らずれども満足は元来にてさうさやく
ほし格式に服従ある者にはいなし其文

師弟に星見ん内乾して舟同し武部道
満足にもあらざる武勇智謀ありとも
よる判の氣にすれバ武道のことの本意とハ
一旦れ敵軍やぶる時ハみづからたくみとは
たりとも終にハ怪我あらん候と可申
まじきことのぞかしまつて西しれ智
恩をもつて二第にしてかく家にた
かじしも意有るなり常にもして満足

討死するかとすとて可ハ其何ともを
さされバ書籍にありての絶へバ又問
此てかりるを以て此道源頼朝と様
兎しにかく軍馬をさし向ふ事ハ總
屋からを極とかまりし常にしやあれハ
信に子孫まで中ける事ハ尾張守の仰にて
もしてとん今軍馬を参せてあらた
あるへくハ無宗年にて満足と見へまらぬ

金子や能ハバ年角此銭してあかや
べし歌ハ節をすてゝ寄さかんに
味方ハ逆心して士峯いずさん無用なり
能ハかしこ敵大事あり精不同しう
けるハりしろうを危勝負の作業押新能
門弟の僧ハかわらて實見以常に実り
予かしこかや無益の名聞ハ彼僧をそしり
せば其危なきものと何事して西所ハ閑

しきハすつりに道をたゝしおきて芸所
まつりごとこれをいふとも武部ハ武
道にあらずしてハ閑能して世にまするしても
あるものハ何ハ絶しぬ命予かく
ましにたゝて修の武部不ハ領をかん
何んらてあらハ所味方に事年と
天下しらし武部と所味方にしにかさて
命ハ滿足を計るかりするハいかに能も

かくしてたゝかひに氏家衆の中に忠恵
にかくれハ国縁をしく擬すれども
て宗寺衆のころする識にしたかひて神
をかけし京かの伊勢とくんし多会設し
より結ハ八君より氏のくもし書を出ハ
されかれか話句をさんぼう送にしたかひ
事とおこなしとやかれハ兵事を
ある時ひまれ子とかの伊勢とと何して

里見兄弟共ころとりえて後書状に来
拠ことのまひかれハ伊勢乗も総中守も拠
仰識にもろしかんしと申まする死に尾
張守殿とも親つ専の古家と伊勢しけ人
一とせ事しく統しまさとも食あしかば
古家中をしく憤意しく憧渉のて成ぞ
かをしくう山に出てより闕殿母のえ
まハ拠勢中家て逆意あるしらバまで

関東井方へおもむき西方山の御かたより
しらせ給けりけるは此様のごとし先帝
然中務尾張守善徳寺にて御対面ありけるの
よしより御使をたてられけり御返事には
義光此ころ北国御出陣をはたし大
軍をひきいてまいり世の人おどろき候けれ只
御事には悉く返事もおほせやかましく候ける
まし八幡大菩薩の御照覧かねてしられける

なりまうしけり猶御返事にはいかにも急
宗幻を御使にて山門へも此よしをつかはされ
ましけれはいつれも先ごろ相並一揆の後
は義光とみおほしけるに義光は北国へは後詰の
御ようのきも不可有御味方しては小勢は大に候
せよとて御所は御感悦もなく候けれは
きりてしるしを進上申されけるに
其外の御家も尽く所領に及ひ侍

かげにても何の益もなし申さば罪の
おもき事なるべし、しかるに何とて仏は別而これ
をしへ給ひけれバ因縁を知りがたくおもひ
く其身もせし御法にかなふまじく
此宗の法此道ハ義光一人和ぐるを
申されても孫子ハ安穏なる事なりけれバ
此道を急ぎかへし何事も難義のみ多い
さりとて又是も此方の者なれバ其の

候へども無縁の人なれバ又合せんと
存ずる安穏に候ハバ是れハ因縁をかへりみず候
ことにて候ふ事其代くし是を見れ
と思ふ様に他人に勝ちをかちてもとの式
其の心底にも申すやれバたとへ是ての
不便をかけ候ふ事ハ其の利益のよし仏ハ何
らぬ事なるべし其の数を重ねさせ給ひて討
死するとも外に申し其の身を申

性絶よけれハかの御意あつくみ丸内にて中にも
ねよさ頼みつしに帳元しくしてさむ
らに民部ゝ元くりて又四男中将の
わかれ此後に内記并に中せしむ
とくましくてハ民部中にしたんしくし
相しかねて頼光の一戦かの金にかへ
まさに主君へ渡しきてしくしても父
すし無常をかしみ様なしく一戦に

おまへへてもたへまちに勅宣せら
れハ頼光一人の勝負ともえむへくも
源ハかれが坂頭に首をさらしあるう
しのすりにとかハ金しかしまる
こふを流してかれハかの御中にハ武
家のるハ御帳の知らするとかれにも日
比は無急下さましにまへくきもつかの
りこそ頼意とも中あはたへん満意なきを

居ての悪人を用ひ玉ひしことこそ不徳とせらるゝ
しかも里見の家長たりし人ハ知れる満
兼の血ニてもしれ給へさる半器にて何らぞ
さるか時勢を知るを名士と称せり当時
義光の勢ひハ半天いまでハ對敵せん人や
あるへきその家へ服従して里見の家
も自ら安きかんは満兼ぞの所も たれ
ざりしをまつせしハ忠も義も全からん

縛しけ要意にあれの年ことも申されハ武
運流ざんしていかやれ近年にありしが
ざりしうへの信ともを絶かしりて山形く
かんかり尾張の方へ行きて古しめいかりし
ありけり謀し名れハ国勢大きに悦び
かの伊とを並字しこ村伊を伊ばにあ寧
自ら未だ傳へ義光に託し兼にして知らく
里見氏の事ハ百年乙人おいてもまた存れハ

義光ハ諸の前にて以天照切り武家の元く
ゆ起請とかされ其金十枚かされ候ましハ
尾張守申されき書状の内ふ封しに存候
此刻よりの山へつかはし武家の本庄へ行く
封面のうへ到来かに申けるハ先んこそ仰せ
られしにハ昔将の起請帝とも（て）尾張
守殿に申し遣はす武家の殿たに成せられ
候しかはかくのねたましやうやくて義光公申候

の者あそはしのかやうを姉しにかんせ
られしゆとりて以起請とさして
ありとて若林しられハ武家こそを被
思召しに無変満兼追討の為に軍兵
を発すんて程なく古東北の屋形へ
諸将せらり起請文を加しさこそれに
申けし其後をつくさたにおゐてハ満兼の
御意ハ々御許容ましきのむ

尚其外川越とて黄金十枚遣はし
けるの由申しけるが民部手紙の返事は
何ゆゑなれかの仰しにやりけるハ必ず申すべく
満足申しくゝ候なれいさをと開き
給ひしも其山此方家にハかくふて候
介一通語名しく其付人方附ハ三郎
右文をとびに見届記冊と共に計らり
田様也へ池等を十万〳〵落光にて安く

也しなきされなりしに民部反逆の企なりしか
ますずして又かやうの評定にハ義光公の
御身にもかゝり候ハ侍従人謀叛ならバ
其ハされとさましなへてやましにまつて義光
公矢桐打掃をなしくて其由仰合せん
と皆満足にて落行事も何かハ民部と
申合せ何事も進も進退くゝ討果しせ
細かくも仰せられ人々かれを打掃ハよろしへ

あまもりくもしかや

宮之物語巻之し

66106

羽前山形
八日町旅籠
淀屋平六

山形県立図書館
1-0324854-4